

『Murakami Review』 特別号 「中国語論文精選①」に寄せて

楊 炳菁

村上春樹文学は、今日、世界各地で広く読まれ、研究されている現代文学の一つである。近年、その研究は日本国内にとどまらず、東アジア、欧米を含む多様な地域へと広がり、村上春樹研究は明確に国際的な展開を見せている。中国においても、村上春樹作品は早い段階から翻訳・紹介され、多くの読者を獲得してきた。それと並行して、文学研究の領域においても着実な蓄積が見られ、作品論、思想研究、受容研究など、多様な観点からの考察が展開されている。しかしながら、これらの研究成果はその多くが中国語で発表されているため、日本の研究者にとって十分に参照されてきたとは言い難い。こうした状況を踏まえ、本誌編集委員の小島基洋先生のご提案により、『Murakami Review』において中国語圏の研究成果を紹介する「中国語論文精選①」を企画することとなった。本号はその初めての試みである。本特集は、中国語圏における村上春樹研究の現在的一端を日本語読者に提示するとともに、今後の国際的な研究交流の可能性を切り開くことを目的としている。

本特集には、三篇の論文が収録されている。これらの論考は、哲学的考察、受容研究、テキスト分析という異なる水準から村上春樹文学に接近するものであり、相互に補完し合いながら、その多層的な理解を可能にしている。

まず、楊永良氏の論文は、哲学的視座から村上春樹文学の主題およびその内在的原理を検討するものである。本稿は、作品に通底する思考の構造に着目し、村上文学を貫く主題的連関を理論的に捉え直す試みであり、個々の作品分析を超えた総体的理解への道筋を提示している。また、

著者はこれまでに複数の著作を通じて、哲学的観点から一貫した考察を積み重ねてきており、本稿はそうした研究蓄積の延長線上に位置づけられるものである。哲学と文学の双方にわたる知見を前提としたこのようなアプローチは、村上春樹文学の主題と構造を体系的に把握しようとする試みとして注目される。さらに、このように哲学的枠組みによって作品全体を捉えようとする視角は、日本における個別テキストの緻密な読解を中心とする研究動向とは異なる方向性を示すものとしても興味深い。

次に、王志松氏の論文は、中国大陸におけるいわゆる「村上現象」を対象とし、その受容の過程を社会的・文化的文脈の中で総合的に考察するものである。翻訳出版の動向、読者層の形成、批評言説の展開などを視野に入れながら、村上春樹文学が中国社会においていかに受容されてきたのかを明らかにしている。村上春樹文学の中国における受容については、すでに藤井省三氏による先駆的かつ精緻な研究が存在するが、それらが特定の問題関心に基づく分析であるのに対し、本稿は受容の全体像をできる限り客観的に整理しようとする点に特徴がある。このような視角の違いは、村上春樹文学の国際的研究における多様性を示すとともに、中国語圏における研究の特質を考える上でも示唆的である。

さらに、関冰冰・楊炳菁両氏の論文は、短編「青が消える (Losing Blue)」を対象としたテキスト分析である。本稿は、作品における「青」の消失という出来事に注目し、その象徴性の生成過程を詳細に読み解くものである。特に、「青」と記憶との連関を軸に、作品内の叙述構造や歴史的連想の働きを分析することによって、象徴がいかに立ち上がるのかという過程そのものに光を当てている。村上春樹「青が消える (Losing Blue)」をめぐるのは、日本においてもすでに多くの研究が蓄積されており、とりわけ「青」の象徴的意味をめぐる解釈が中心的な論点となってきた。それに対し、本稿は象徴の意味内容そのものよりも、その生成のメカニズムに着目する

点に特徴がある。このような視角は、既存の解釈を補完しつつ、テキスト読解の方法論的再検討を促す契機となるものである。

以上の三篇の論考は、それぞれ異なる方法と対象を持ちながらも、村上春樹文学の多面的な理解に寄与するものである。本特集が、中国語圏における研究成果を日本の読者に紹介するとともに、今後の国際的な研究対話を一層深化させる契機となることを期待したい。

最後に、本特集の企画にご理解とご協力を賜り、貴重な論文をご執筆くださった執筆者の諸先生方に、心より御礼申し上げます。